

#6 Team LeMans Audi R8 LMS
Yoshiaki Katayama
Roberto Merhi Muntan



大会概要

2022年 SUPER GTシリーズ 第5戦

大会名称

2022 AUTOBACS SUPER GT Round5 FUJIMAKI GROUP SUZUKA GT 450km RACE

開催日時

8月27日 土曜（予選） 8月28日 日曜（決勝）

開催サーキット

鈴鹿サーキット（1周：5.807km）

所在地：三重県鈴鹿市稲生町7992

同時開催レース

2022 FIA-F4選手権 第7戦・第8戦

Porsche Carrera Cup Japan 2022 第9戦・第10戦

主催

関西スポーツカークラブ（KSCC）／鈴鹿モータースポーツクラブ（SMSC）／ホンダモビリティランド株式会社

公認

国際自動車連盟（FIA）

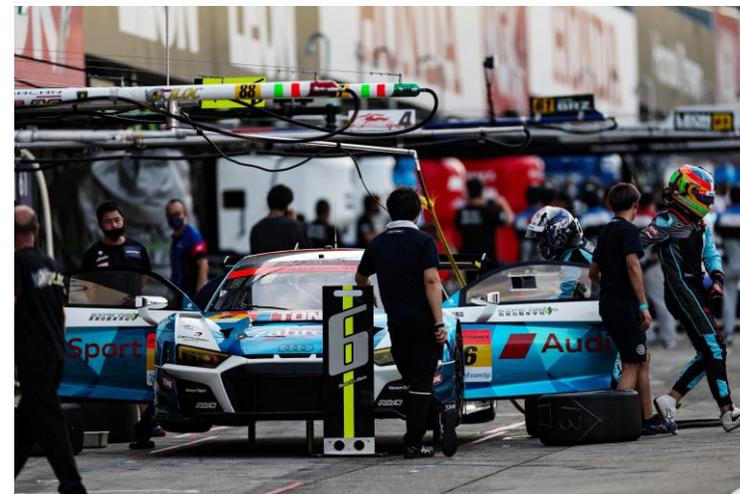
一般社団法人 日本自動車連盟（JAF）

認定

株式会社GTアソシエーション

後援

経済産業省／国土交通省／自由民主党モータースポーツ振興議員連盟／三重県／鈴鹿市／鈴鹿F1日本グランプリ地域活性化協議会／一般社団法人鈴鹿市観光協会／鈴鹿商工会議所



◆ 参戦体制

■ ドライバー



片山 義章
YOSHIAKI KATAYAMA

生年月日 1993年11月13日
出身地 愛知県
身長 168cm
体重 69.3kg
血液型 RH+O



ロベルト メルヒ ムンタン
ROBERTO MERHI MUNTAN

生年月日 1991年3月22日
出身地 スペイン
身長 178cm
体重 70kg
血液型 RH+O

■ 監督



小倉 啓悟
KEIGO OGURA

■ スタッフ

チーフエンジニア 近藤 良一
チーフメカニック 田村 貴史

■ スポンサー

ザレン・コーポレーション株式会社	株式会社デジテックエイチピー
TONE株式会社	コスモ開発株式会社
ニチアス株式会社	ウエスタンデジタルジャパン株式会社
エバー株式会社	医療法人さかくら耳鼻咽喉科
カトー機械株式会社	ARMS株式会社
城東電機株式会社	ブランデューズ株式会社
株式会社ジョイフル設備	株式会社PACIFIC RACING TEAM
青山エレベーター株式会社	B.R.M / Viron Japan 株式会社
岡田金属株式会社	高新自動車学校
エルアイビーリゾート株式会社	見田工作株式会社
	SPIN OFF

◆ 予 選

天候 くもり

コース状況 ドライ

気温 31℃ (GT300クラスQ1開始時)

路面温度 39℃ (GT300クラスQ1開始時)

予選開始 15時20分 (GT300クラスQ1-A組開始)



3週間前の第4戦富士では、入賞こそ逃したものの、マシンの仕上がりやドライバーの速さ、チームとしてのパフォーマンスに手応えを感じていたTeam LeMans。その勢いそのままAドライバーに片山義章、Bドライバーにスペイン人のロベルト・メルヒを擁するチームが、ここ鈴鹿の450kmレースに挑んだ。

8月27日の午後には、決勝のスターティンググリッドを決めるノックアウト方式の予選が行われた。参加台数が多いGT300クラスでは、A、Bの2組に分かれてそれぞれ10分間のQ1を行い、各組の上位8台がQ2に進出するが、ここ鈴鹿には27台がエントリーし、#6 Team LeMans Audi R8 LMSはQ1-A組でQ1突破を目指した。

#6 Team LeMans Audi R8 LMS

予選結果：10位 (予選Q1ベストタイム：1分57秒798/メルヒ選手)

(予選Q2ベストタイム：1分58秒393/片山選手)

予選に先立ち、午前中には公式練習が行われた。メルヒは、ペナルティポイントが5点なり、セッション後半の1時間の参加が禁止されるペナルティが科され、一方、マシンもセットアップもうまく決まらないなど苦しい時間が続いた。そこでチームは予選に向けてマシンのセットアップを変更し、気持ちを改めて15時20分からのQ1に挑んだ。

くもり空のもと行われたQ1はメルヒが担当。変更したマシンのセットアップと、選択した柔らかめのタイヤ、路面温度などの条件がマッチし、計測2周目にマークした1分57秒798は暫定トップ。その後、#55 ARTA NSX GT3にトップを奪われたものの、#6 Team LeMans Audi R8 LMSは2番手のポジションを守り、見事Q2進出を果たした。続く片山は、Q1とは異なる少し硬めのタイヤでQ2に臨んだこともあり、メルヒのベストタイムには及ばなかったものの、1分58秒393は10番手と今シーズン最上位を獲得。決勝での入賞に向けて、チームの士気は高まっていった。



◆ 決 勝

天候 晴れ

コース状況 ドライ

気温 28℃ (スタート時)

路面温度 39℃ (スタート時)

決勝レース開始 14時37分

レース予定周回数 77周 (約450km)



#6 Team LeMans Audi R8 LMS (片山&メルヒ選手) 決勝結果: 5位 (所要時間: 2時間37分34秒794=72周消化/ベストラップ: 2分1秒702=メルヒ選手)

決勝を前に青空が戻ってきた鈴鹿サーキットでは、14時37分、77週の決勝レースが幕を開けた。この鈴鹿では片山がスタートを担当。Q1で使った柔らかいめのタイヤを履く片山は、タイヤの摩耗に気遣いながらも、最初のスティントは10番手を維持。そして、13周を終えたところで1回目のピットストップを実施。給油とタイヤ交換を行ったのち、ドライバーは片山のまま、コースに復帰する。

少し硬めのタイヤを手に入れた片山は、実質10位前後のポジションを確実にキープする走り周りを重ねていく。路面温度が徐々に下がるにつれ、マシンとタイヤのマッチングはさらに向上し、片山の好調なペースが続く。その後も片山は着実に周回を続け、38周を終えたところで2回目のピットストップを行った。

給油、タイヤ交換、さらにメルヒにドライバー交替を行った#6 Team LeMans Audi R8 LMSは再びコースへ。メルヒはコース復帰直後の41周目に2分1秒702のチームベストをマークし、その後も速いペースで周回を続けていく。46周目にはGT300のマシンが130Rでクラッシュしたのが原因でセーフティカーが導入。すでに必要なピットストップを終えていた#6 Team LeMans Audi R8 LMSは、これによる不利を被ることはなかった。56周目、9位まででポジションを上げたメルヒは前を走る#52 埼玉トヨペットGB GR Supra GTを追い抜こうとした際にオーバーランし、逆に10位にポジションを落としてしまう。

それでも、60周が終わり、GT300クラスの全車が規定のピットストップを済ませた時点で、#6 Team LeMans Audi R8 LMSは入賞圏内の9位を確保。その後も速いペースで追い上げを見せるメルヒは、トラブルなどでポジションを落とすライバルを尻目に、65周目には6番手に躍進。さらに次に周には5番手にポジションアップを図った。メルヒは再び前を行く4番手の#52 埼玉トヨペットGB GR Supra GTに攻め寄るが追い抜くにはいたらず、レースはそのままゴールを迎え、#6 Team LeMans Audi R8 LMSは開幕戦に並ぶ5位で、今季2度目の入賞を果たした。ほぼ完璧なレース運びで手に入れた5位。次の第6戦菅生でTeam LeMansはさらなる高みを目指す。



片山 義章 選手のコメント

練習では予想外に苦戦を強いられましたが、予選に向けて少しセットアップを変えたらそれがうまくいって、ふたりとも練習のときより2秒も速くなりました。練習からこのタイムで走っていたら、予選はさらに上に行けたかもしれないと思うと少し悔しいです。決勝では、少し硬めのタイヤに換えた第2スティント以降、路面温度が下がるにつれてどんどんタイムが良くなってきました。Audi R8 LMSはタイヤに優しいということもあり、最後まで速いペースを続けられたおかげで、最終的に5位でフィニッシュすることができました。

ロベルトのスティントで他車と接触する場面があり、それがなければ表彰台が獲得できたかもしれません。チームの実力は表彰台に手が届くところまできているので、次の菅生ではさらに上を目指したいと思います。

ロベルト・メルヒ・ムンタン選手のコメント

この週末の結果には大変満足しています。前戦の富士以来、チームは大きく進化し、とくにこの鈴鹿での躍進は素晴らしいものでした。マシンのセットアップや戦略に関しての射を射ていて、次の菅生ではさらに良い結果を示すことができると確信しています。

予選は、“よっちゃん”（片山選手）が良いパフォーマンスを見せてくれたおかげで、今季最上位の10番手を獲得できました。私が担当したQ1も、全体で2番手という速さにとても満足しています。第3戦の鈴鹿は予選18番手でしたので、今回の良好な予選順位や、レース中にはたくさんのライバルを追い抜くことができことから、チームの順調さがわかるはず。とにかく5位は素晴らしいリザルトです。今後、表彰台争いができると革新しています。私に対するチームのサポートも厚く、また改善のために私の言葉に耳を傾けてくれています。Team LeMansには感謝の気持ちでいっぱいです。

小倉 啓悟 監督のコメント

前回の富士の時点でマシンが良い状態に仕上がっている感触があったのですが、いざ鈴鹿の公式練習を走ってみるとマシンが決まらず、タイムも出ない状況。なんとしてでもQ1を突破したかったので、セットアップを変更し、柔らかめのタイヤでQ1に挑んだところ、マシンとタイヤと路面コンディションがマッチし、ロベルトが素晴らしいタイムでQ1を突破してくれました。

これなら決勝は面白い展開になりそうだなと思っていましたが、実際そのとおりでした。今回はレース中に大きなミスもなく、ピットワークも上手くいきました。ロベルトのスティントでライバルを追い抜こうとしたときにオーバーランして、逆にポジションを落とす場面がありました。それがなければ表彰台が獲得できかたかもしれないと思うと悔しい。しかし、それ以外はブランドおりにレースを進めることができたのは、チームにとって大きな自信につながるはず。前戦からエンジニアが変わったことも良い効果を生み出しています。次の菅生はロベルトにとって初めてのコースです。サクセスウェイトも増えますが、いまのマシンパフォーマンスを考えると面白いレースになると思いますので、私たちの戦いにぜひご期待ください。

